

フィジーのアゲハ = *Papilio schmeltzii* 観察大?作戦 Part 1 = 2000年7月

私は2006年3月に萩谷先生の率いる『フィジー調査団』に初めて参加させていただいたが、それ以前の2000年6月にも同国のビチレブ島を訪れた。目的はこの国に特産するアゲハ = *Papilio schmeltzii* に会い、彼等の生活実態を聞き出すことにあった。フィジーは *Papilio* = ミカン科及びセリ科植物を主たる食草とするアゲハ類(日本のアゲハ類ではキアゲハ、アゲハ、カラスアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ等9種が含まれる)の自然分布する島としてはアジア大陸から一番東に離れた場所に有り、またその島に産する種 = *schmeltzii* が *Papilio* の中ではどのグループに入るのかは、*Papilio* 属全体の構成や成り立ちを考える上で非常に重要と考えたからである。ただしこういう事情は置くとしても、調査をする順からすれば、実は私はまだソロモン、ニューカレドニア、バヌアツ(これらの諸地域にも *Papilio* は分布している)を訪れた事ではなく、パプアニューギニアやオーストラリアから一足飛びにフィジー入りしたのはものの順序としては多少問題という声が出るかも知れない。こうなった理由は誠にせせこましい話で恐縮だが、実は2000年の始めに、ニュージーランド航空と(今は無き)アンセットオーストラリア航空がユナイテッド航空を盟主とする『スターアライアンス』に加盟、その御祝儀として搭乗マイルの2倍加算サービスを打ってきたことにある。当時、NZ航空は関西→ナンディ→オークランド及び名古屋→ナンディ→オークランドのフライトを設定しており、これらの便の途中搭乗でも2倍マイルを加算するというので良い機会とばかりに飛びついたのである。こうした不純な動機で出掛けた罰はこの旅行の開始直後からあちこちで下されたが、流石に天も徹底的に非情という訳ではなく、目標のチョウ1名を私のすぐ近くに遣わせてくれた。私はこのチョウを多少不本意ながら採集し、最低限の成果を得る事だけは出来たのである。従ってその後も機会があれば再訪して吸蜜や産卵等の動画撮影をと思っていたが、日本国内のチョウを相手にする仕事はここ数年立て込んでしまい、その機会が作れなかった。なおかつ、フィジーのチョウに関する情報はその後も全く得る事が出来ず、踏ん切りが着かないままだった。そういう点で、今回、萩谷先生の調査団に参加させていただいた事、その結果として南太平洋大学の研究者と既知になれたこと、そして何より訪花場面だけではあつたがこのチョウの動画撮影が出来た事に関し、萩谷先生以下、おつきあい下さった方々には深くお礼申し上げます。

今回紹介するのは、このチョウを探して初めて単身フィジーに来た時 = 2000年の記録である。一応の観光ガイドはあるもののチョウの調査といった特殊な目的の参考になる様な文献も全く見つけられないままぶっつけ本番で行ってしまった感が強い。なおかつ、この時は筆者が出掛ける直前に現地でクーデターが発生するわ、予約しておいた飛行機が欠航になって日程が短縮されるわ、頼みのデジタルビデオカメラが日本を出国しないうちにダウンするわ、更には手荷物として預けた網の柄が旅行最終日になるまで迷子になったわと散々な事になった(上の段落で書いた『罰』とはこれらのことである)。こうした悪条件下で最低限の目標は達成できたのだから恩の字かも知れない。では取り敢えずその時の悪銭苦闘の模様を、当時の日記から抜粋して紹介する。

6月27日 羽田→関西→翌朝ナンディ着 の筈がオークランド泊に!

前述の通り旅行案内はいくつかチェックして、最初の数日はとにかくナンディに宿泊する事にし、その成果次第では隣の国 = バヌアツへのアイランドホッピングも考えていた。しかし残念ながらナンディーポートピラ間のフライトはこの時点で満席という事で、今回はおとなしくフィジーのビチレブ島のみを歩く事にした。ところがこの日関空へ行ってみたら何と搭乗予定便が欠航になっていた。一応同系列のアンセット航空便でブリスベンに行き、そこからオークランド→ナンディと行くコースに振り替えてはもらったが、途中のオークランドでの接続がうまく行かず、この日は同地での宿泊を余儀なくされる。しかも手荷物として預けた捕虫網の柄が行方不明に!!

6月29日 24時間遅れでやっとナンディ到着。

ということで予約を入れておいたナンディのモキャンボに丸1日遅れで到着。宿泊日数の変更は日本の代理店経由で完了させておいたが、ホテルタクシーの変更までは伝わっていなかったのか出迎えはなく、一般タクシーを使ったため3FJDの損。上空から見たフィジー島の特に西半分位は丸禿げに近い印象を受けたが、降りてみたらまずまず草木は有り、チョウもホテル周辺で何種類か観察。取り敢えずナンディタウンまで歩いて(1時間30分かかった)本屋を探すが無し。帰りは路線バスを使う。ホテル下のロータリーまで0.65FJD。ホテルのフロントにはツアーデスクがあるが、何故か係員は午後はおらず。午前中だけらしい。朝は7時からやっているというので、明日朝にまた来てみる事にする。

7月1日 晴天のナウソリ高原行き

6月30日はツアーへの参加手続きと空港への問い合わせ、更には本屋探しで潰れる。これらは何れも成果無し。ナウソリ高原へ行くにはホテル下のロータリーからスバ方面に進み、途中でナウソリハイランドロードに入る。後は1本道で迷う心配はなさそう。車で30分程送ってもらい、後は徒歩となる。大体2時間少し歩いて目的の集落到着し、カバでの歓迎+昼食となる。食後に『レモン茶』として出された飲料水は、お茶にレモン香料が入っているのではなく、レモンの葉をもろに煮出した様な強烈な味だった。その後14時になった所で帰路につく。かなり禿げ山的な景観が広がっているが、その中に何故かマツ科植物がかなり生えている。ガイド曰く、あれは北米原産のマツ科植物で、日本にも輸出しているそうだ。10分ほど歩いた所で迎えの車と合流。ホテルには14時40分頃に帰着。その後はやはり情報収集、特にロードマップの探索を行うが、予想通り?不発に終わる。

7月3日 ナバラ村へ。天気曇

2日は旅程後半をどうするか思案。当初、島の北東部への1泊ツアーに参加しようと思ったが、2人以上でないと言われ断念。よって5日からはホテルを島の南西にあるシンガトカ近郊のフィジアンリゾートへ変更し、そこを拠点に動く事にした。もう1つ、おかしな事に空港内のツアー会社のデスクの前には今回諦めたバヌアツ行きの手配が可能(日本で調べてもらった時には

既に満席という返事だった便)という表示があった。もしかしたら現地のツアー会社が買い占めているのかも知れず、次回渡航の際には気を付けた方が良さそうである。今日は島の北側を約 1/3 周し、内陸部に入るツアー。途中、ブンダポイント、ラウトカ製糖工場、バ製糖工場等を車窓から見学。一方、何とかアゲハ類が住んでいそうな森林は川の流れの周辺に僅かに残るのみ。後は岩盤丸出しか、草原か、さもなくばさとうきび畑と言った有り様である。目標の集落へはバ川に沿って遡行する。この道筋は良好な樹林が残っていて目標らしいチョウを 1 回だけ目撃したが、集落周辺は逆に丸禿げて、ここも余り効率の良い事にはならないと判断する。

7月4日 シンガトカ川遡行→洞窟見学+目標 Get!

フィジー入りして以降天気は日毎に悪化し、今日は遂に朝から雨となった。8時15分にホテルを出たものの目的地まで行く間にあちこちのホテルで参加者を回収し、更にはシンガトカの少し先のツアー会社の事務所で食料品やら何やらを積み込むとかで、川の東側の道を遡行し始めたのは11時近くになっていた。尤もクイーンズロードの走行はかなり面白く、ナンディイを出て暫くはホテル周辺同様道端には全てギンネムと思われる植物が密生していたのが、フィジアンリゾートの一つ手前の峠を超えた辺りから植生が変化し、熱帯樹林的な景観がちょくちょく見られるようになる。後で判った事だが、やはりこの辺りで降水量が劇的に変化していた。目的地の集落 = Toga 村には12時丁度に到着。この頃には雨は上がって薄日が射してきた。名前からして連想される通り、トンガからの移民がフィジーに最初に作った集落という話である。村内の長老宅?でカバを頂き、昼食を済ませた後 Naihehe 洞窟へ向かう。村から更に上流へ向かって少し進み、シンガトカ川の支流を横切る橋の袂から、この流れの上流方向に進むと洞窟の入り口に到着する。この洞窟内には先史時代のものと思われる遺跡があるらしいが、当然の事ながら中は真っ暗で(日本の有名鍾乳洞の様な電照設備はない)よく判らず。おまけに水の中を這う様にして進むような場所もありでかなり厳しい探検となる。それでも



持って行ったレンズ付きフィルム5本の内の2本がストロボ付きだったため駄目元で撮りまくった。洞窟からは参加者全員濡れ鼠となつての脱出である。もと来た山道を自動車道路の方に向けて歩いていた時、進行方向左側(山側)の林の中から右方向(沢側)にゆっくりと飛ぶ中型チョウを確認。後を追う。間違いなく目標の *schmeltzii* だ。やはりこれは採集させてもらいところ。他の参加者はそのまま道を進んでいく。あまり時間は取れないと思った時、そのチョウは手近にあった木の花に静止。これを難なくネットし、あっさり目標達成。ちょっと擦れたみチョウだったが、出来ればいろいろ聞きたかったので、殺さずにそのまま輸送箱に入れた。大急ぎで他の参加者を追い、置いてきぼりにされずに済んだ。その後、竹製の筏に体験乗船?。1集落分位をこれで移動した後、来る時に寄った集落に再度お邪魔し、乗ったワゴンに再度乗車。各人、無事宿泊先のホテルに帰還。



7月5日 フィジアンリゾートへ移動。周囲にはいろいろなチョウとカレーブッシュ!?

このホテルには昨日もツアー参加者回収の為に立ち寄っており、立地その他は掌握済。チェックイン後、早速、道具を持ってホテル周囲を散策。目標のアゲハは出てこなかったが、この日は天気がまずまずだった事もあって、チョウはそこそこ飛んでいた。ところがクイーンズロードを歩行中に、道端の空き地にカレーブッシュが大量に生えているのに気付き、愕然と成る。このカレーブッシュ = *Murraya koenigii* は南インド = タミール系の人たちが常食としているカレーに絶対不可欠の調味用ミカン科植物で、日本食に例えれば蒲焼にサンショウのような物である。こんな植物がフィジーに元からあったとはとても考えられず、南インドからの移住者が持ち込んだものに違いない。ただしこれらの葉に幼虫の食痕らしいものは皆無で、*schmeltzii* はこの植物を利用していないようである。なお昨日～今日の実績により、次回は島の北西部での活動は放棄して空港から直接シンガトカ入りし、ここを中心に動いた方が効率は上がると判断した。

7月6日 小雨のクラ・エコ・パーク

この日も天気は小雨交じりで、ホテルの従業員も『今は乾季なのに今年はどうもおかしい』と言っていた。目的地までは路線バスを2本乗り継いで出掛けたが、なぜか開園中の筈なのにゲートは閉まっている。代わりに?本来は閉じている筈のゲートが開けっ放されており、こちらへ入ってみた。奥の方のミカン園一行き止まり周辺には黒いマダラ類がちらほら。この辺を散策するうち、

今回2名目となる *schmeltzii* と対面。このチョウも♂チョウだったので無理に採集しなくてもいいかと思って見ていたら、背後から声。『ここはまずいから園内に入って』という。そんなこと言ったら、ゲートが閉まっていたぞと言ったら、『それは済まなかった』という回答。おとなしく入園料を払って見学させてもらおう。中ではミカン類、カレブッシュの他、ゲッキツ、それに明らかに *Melicope* と判るミカン科植物まで植えてあった。チョウの好きな従業員の方から『特に9月の天気の良い日の午前中には、ここにはチョウがいっぱい居るぞ』と教えられる。更に *Melicope* については『この木は万能薬の木としてここでは重宝している。特に胃をやった時には一番頼りになるんだ』とのこと。帰りはたまたまチーフの方が車でシンガトカの街中へ出るから送ってやるよと言ってくださったので、それに甘える。ここからは路線バスで帰還。

7月7日 野外調査最終日 = ナブア川上流ツアー(1999年某賞受賞作品?)

この島の川は大体中心山地から流れ出ているが、この川に限っては水源が山の中ではなく山裾といった感じで、ナブアの街の北側で流れが西に向かうというおかしな流れ方をしている。目的地はこの川の上流の *Namuamua* 集落だが、ナブア市内からこの集落へ行く自動車の走行可能な道路はないとかで、市内を出てすぐにボートに乗り換えて川を進む。途中には簡単に上陸できるような場所無し。ガイドによると行った先でチョウはそこそこ見た事があるという話だったが、やはり天気の関係かこの日はチョウは出てきてくれず。地質学+民族学的には面白そうな場所だが、チョウに関してはやはり行き難い事も有り、シンガトカ川流域に比べると魅力は劣っている。この翌日はホテルを元いたモキャンボに戻し、9日のニュージーランド航空便で関西へ戻った。ということで、次回調査時はシンガトカ川流域を徹底的に洗おうと思ったが、これが物の見事的中する事になった。これについてはまた別の機会に。